

第二百四十五話 謎の反転「320度、右一斉回頭」

諸説紛々として、未だに解明されていないのが「栗田艦隊の謎の反転」である。
偏見と独断で、本件に関して幾つかの所見を述べる。

1 レイテ沖海戦の経緯

絶対国防圏の中枢であるマリアナの失陥(1944/7/9)により、大本営は新国防要域の防備を急速に強化し、同要域のいずれかの方面に敵が来攻した場合、陸海空戦力を結集して決戦すべく企図し、この作戦を「捷号作戦」と称した。捷一号(比島)、捷二号(台湾、南西諸島)、捷三号(本州、四国、九州)、捷四号(北海道)の各作戦に区分された。1944年10月米軍のレイテ島上陸がほぼ確定したことから、捷一号作戦を発動した。陸海の基地航空部隊を集中し、連合艦隊の残存兵力を集中して海空決戦を強要する計画であった。然しながら、航空総攻撃は十分な可動兵力を集中し得ず、所望の戦果を挙げるに至らなかった。(参考までに、この攻撃において、初の航空特攻「神風特別攻撃隊」による航空特攻が敢行された。)一方、水上部隊が戦ったレイテ沖海戦は、シブヤン海海戦(戦艦武蔵沈没)、スルガオ海峡海戦(西村、志摩艦隊がほぼ全滅)、エンガノ岬海戦(囷となった小澤艦隊(空母6基幹)の作戦)、そして謎の反転が生じたサマール沖海戦(栗田艦隊:大和、武蔵を含む戦艦5、重巡10基幹)からなる。

栗田艦隊のレイテ湾突入は、南方の西村、志摩艦隊と呼応して、7月25日昼に実施することになっていた。他艦隊の犠牲の間に、サマール島沖に進出した栗田艦隊は、遭遇した敵護衛空母群を正規空母部隊と誤認して砲撃・追撃した後、レイテ湾突入を目前にして、敵機動部隊発見の報(ヤキーカ電と呼ばれる。真偽不明発信者不明の電報)により、1230独断で、レイテ湾突入(湾口約83km手前海域に到達していた。)を放棄して後退した。これが謎の反転である。連合艦隊の壊滅だ。



2 謎の反転の理由に関する諸説

栗田中將には、敵機動部隊との決戦を言い訳にした突入断念ではとの批判(怯將との批判する者もいるが、言い過ぎでは)。勿論根強い擁護論もあることを付記する。

中將は基本的に黙して語らず(戦後米軍の調査時には多弁とも)

・ 栗田中將の過労説

- ・ 乗組員疲労困憊、艦艇は満身創痍でありこれ以上の戦いは犬死
- ・ 艦隊保全思想
- ・ 敵機動部隊撃滅を優先(敵機動部隊撃滅優先は連合艦隊了解事項?)
- ・ 敵輸送船団を撃滅しても、効果は疑問であるばかりではなく、栗田艦隊も全滅を免れぬ。基地航空部隊の戦果も不十分で、栗田艦隊まで全滅しては、比の防衛は失敗(輸送船団の撃滅及び上陸部隊への砲撃は効果なしと判定し得る?)

3 若干のコメント

- ・ 広範囲に展開して策応する作戦における情報の共有の重要性、通信の確保必須
- ・ ヤキーカ電の謎
- ・ 任務のより積極的達成に寄与する独断ならばいざ知らず、掛かる場合の後退は?
- ・ 艦隊撃滅優先は絶対的な目標なのか? 明確にレイテ湾突入が指示されているにも関わらずに、それをも放擲するような絶対的な目標ではないのでは。
- ・ 他の艦隊が犠牲を払いながら必死に任務遂行中に主役が舞台を降りるとは!
- ・ 台湾沖航空作戦(1944/10/12~10/16)の大誤報の影響もあった?
- ・ 護衛空母群に対する攻撃等は時間の浪費ではなかったのか?
- ・ 敵情不明は戦場の常、戦場における指揮官の決断は何を基準とするか?